

ケンギル都市同盟について

——初期メソポタミア史の一問題——

中原 与茂 九郎

梗概 シカゴ大学の T. Jacobsen 教授は数年前に Zeitschrift für Assyriologie, N. F. 18, (1957) 誌上に「メソポタミアにおける初期の政治的発展」と題する五〇頁におよぶ大論文を發表された。同教授は当該論文のうちに Fara 出土の粘土板文書のうちの行政文書を資料として初期王朝ⅡとⅢの過渡期にシュメールにはウルク、アダブ、ニブール、ラガシュ、シュルッパーク、ウマの六都市国家によって軍事的都市同盟が締結されていたことを提唱された。同教授はこれを Kengi League と呼称された。またこのような都市同盟の存在は初期王朝Ⅰ期の文献とされているウル出土の古拙文書にすでに見出されることを指摘された。

ヤコブセン教授のケンギル同盟説を同教授が使用されなかったファラおよびウルの行政文書をも加えて検討吟味したのが本論考である。ヤコブセン教授がファラ文書の EN. GI. KI を Kien-gi-Kengsi (=Kalam (=Sumer)) すなわちシュメール全土の意味に解釈されたのに対して筆者はこれを同盟本部所在地であり、この本部所在地が全土の意味に使用されるようになるのは初期王朝Ⅲ期の中頃であることを推論した。

はじめに

筆者はさきに「シュメール都市国家と『国土』の人口について」^①において西紀前二五〇〇年頃のシュルッパーク

(Shuruppak) 都市国家の自由民人口を当時の行政文書を資料として約一六万と計算した。またラガシュのエンシ、エントメナ (Entemena c. 2400 B. C.) がニブールのエンリル神へ奉納した水瓶の残存破片に記録されている従来ラガ

シュの人口と考えられていた三六〇〇人をラガシュ以外の他の都市の自由家族の家長の数であると論証した。またラガシュのエンシ、グデア(Gudea c. 2100 B. C.)の肖像碑文Bに記録されている円数二一六、〇〇〇人はグデアの支配下にあった「国土」(atum)すなわちシュメールの広い地域に居住する自由家族の家長(abba)の数と解して、京大教養部の『人文』誌において一二家族五五人を記録している行政文書を分析検討して得た自由民家族員四名をこれに乗じて八六四、〇〇〇人という円数を得た。この円数は『人文』にとりあげた Druk, Adab, Nippur, Lagsa, Šuruppak, Umma の六都市国家間に締結されていた「ケンギル同盟」(Kengir League) 諸国の自由民人口八八四、一六〇人にひびき、指摘した。そしてこの二つの数字の近似から推してグデアの支配下にあった「国土」とは叙上六都市国家を含むシュメール全土の重要地域の大半を占めるものであること、そしてケンギル同盟に加入していなかったウル(Ur)その他都市を含めれば全シュメールの自由民の総人口は一〇〇万を下らなかつたであろうと推算した。

最近筆者が手にしたクレーマー教授(S. Z. Kramer)の大作 Sumerians (1963) の第三章「社会・シュメールの都市」で同教授はシュメールの人口問題について次の如く述べておられる。

……都市人口の大きさの算定を試みたい。しかしこれは合理的正確さをもって行うことはむづかしい。それは公式の人口調査の記録がないからである。いなすくなくともあとづけをする資料が未だ発見されていないからである。ラガシュに關してはディアコノフが經濟文書による、どちらかといえば不完全な間接的データによって研究した結果自由民人口を一〇万人と計算した。ウル第三王朝の首都ウルの前二千年頃の人口についてウーリー(C. L. Woolley)は一九五七年にかれの論文「社会の都市化」において約三六万と推算した。かれの数字は薄弱な比較とうたがわしい臆説とを基礎としているのでその数字は約半分に切つた方が賢明であろう。それにしてもウルは二〇方に近い人口をもっていたであろう。

と。これによって最近欧米におけるシュメール都市の人口についてはラガシュ、一〇万、ディアコノフ、ウル三六万、ウーリー(約二〇万)、クレーマーの三説がある。筆者がシュメールの都市やシュメール全土の人口を考察するに至つ

た動機はヤコブセン教授 (T. Jacobsen) の『メソポタミアの初期の政治的發展』のうちに取り上げられた「ケンギル同盟」説にヒントを得たことであつた。そこで本稿においてはケンギル同盟の存在、性格、意義などについて管見をのべてみたい。しかしそれに先立って『西南アジア研究』第一〇号の拙稿の一部の訂正を行いたう。

一 アッカド時代のラガシュの

地積の再考

『西南アジア史研究』第一〇号所載拙稿中、「(5) アッカド時代の一碑文に記録されているラガシュの地積について」一一七頁下から四、五行の「この数を碑文に残っている実数に加算すれば、その合計面積は 198,094 bur 13¹/₄ ku, 平方キロに換算すれば約 1,980.94 km²となる」の 1,980.94 km² を 12,579 km² に訂正する。この地積はラガシュの地積というより、むしろシュメール全土の地積に措定される広さである。ソ連のディヤコノフ氏は「Bureau-Dangin が 3,600 と解した単位数字を 600 と解して、この石柱碑文の地積を 1,339 km² に換算されている」⁽⁴⁾

石柱碑文には表面から裏面 Col. IV 7 まではその大部分は破損しているが残存部分には合計された地積と土地名とが列記されている。一四行目の *Šu ba-ab-ti-ta* が本碑文の性格を決定する重要な鍵となっている。その文意は、「彼が受けとつたもの (*Šu ba-ab-ti-ta*) から (*ta*)」である。また (12) *A-ga-de²* (13) *nam-lugal* の語順からして「アッカド王国」(*nam-lugal Agade ki*) でなく、「アッカド」⁽⁵⁾ 「王国」と理解せねばならない。この二つの文法約束を生かして前論文の引用文を解釈すれば次の如くである。

合計 12,579 km² —— 合計十七の主要都市 (が) 合計八の主要区劃地 (*maš-ga-na sag*)⁽⁶⁾ (の中にある) —— は、アッカドのほかに、王国に彼が受けとつたものであり、そのうちから、「石碑に具体的に記してある土地名と合計地積とをラガシュのエンシ支配地として、某に与えた」⁽⁷⁾

このように解される 12,579 km² をシュメール全土の地積と措定すれば、「八の主要区劃地」(8 *maš-ga-na sag*) をアッカド王朝の属州統治の「八行政区」と解して、前論文に既述した「サルゴン年代記」の伝承に従ってこの数を八にて除した平均値 15,72 km² をアッカド時代の「ラガ

シニ州」の大凡の地積としてあげることが出来る。したがって前論文のラガシニの地積 1,980 km² はこれを約 1,572 km² に訂正すべし。

アッカード時代のラガシニは同王朝の行政区編成の際、初期王朝末期のラガシニに更にいくばくかの地域が附加されたものから成立しているとなす筆者の前論文の考えはこの換算地積訂正によっても不変である。ちなみに前論文では触れなかったが、仮りにウルカギナ王末年に彼がウンマのエンシ、ルーガルザッギシに破れ、ラガシニ王からギルス王の地位^⑨に転落し、ラガシニ領のすくなからぬ地域を失っておったとしても、その失地はアッカードの「行政区」に編入されていると考えるのである。

二 ヤコブセン教授の「ケンギル同盟」の提唱

『人文』、『西南アジア研究』両誌で筆者が取り扱ったシニエール都市国家の人口の考察に使用した資料は当時の行政文書や王碑文に記された記事と数字とである。これら記事との関連において数字を操作する方法を思い付くにいた

ったのはシカゴ大学のヤコブセン教授 (T. Jacobsen) の論文 "Early Political Development in Mesopotamia" のうちに提示された「ケンギル同盟」(Kengir League) の存在^⑩に示唆をえたによる。そこで本章において同教授が提示されたケンギル同盟についての同教授の所説^⑪を紹介し、それに関連して筆者の管見を述べてみたい。

ケンギル同盟存在についてのヤコブセン教授の論考は実証資料に基づくもので神話、伝説を援用する推論でないのが特徴的である。教授はダイメルおよびジェスタンの手写、翻字になるフアラ文書を研究された結果侍従 (miskim)、代理 (maskim)、小姓 (sukkal)、酌とり (sagid)、料理人 (muhaldim)、楽人 (Ur-AD) など宮廷生活にふさわしい職員のおびただしい人数——一四四名の酌取り、一一三名の楽人や歌手、六五名の料理人等々——を記した文書を見出された。また鍛冶工、石大工、籠作り等の専門技術者の人数も同様におびただしい数にのぼるのを知られた。これらの階層に属するもので宮殿にやとわれた人々の数は殆んど信じ難い程の大量である。フアラ文書の発見された宮殿に措定される建物の大きさと比較するときフアラ文書に記録されている現実

の巨大な生計集団 (mammoth household) は別個の目的——

軍事的と推定される——で構成された組織を表現している
のではないかと推測された。「六七〇名の戦いに行く人」

(670 gurruš me (še) gen)、「合計六八〇人、戦い」(ša-an-še
680 gurruš me)と記した文書や「戦いに行った」(na(še)gen)、「

戦いから帰った」(na-ta-gen)などの語句を見出された。

同じ性質の内容を記している二個の文書を見つけられるに
およんで、ついにケンギル同盟の構想を打ち出された。文

書に記された「どこか他の場所に滞在している人々、シユ
メール人」(people stationed elsewhere, Sumerians: In ba-

durun Ke-en-ši)をシュルツパークから他の地点に移された
ケンギル同盟軍であろうと解された。また両文書に記され

た六都市がともに同じ順序に並べられているのもって筆
頭に出てくるウルクを当該同盟の指導的都市であろうと推
断された。

ヤコブセン教授は本章(第六章)に「シュルツパーク出土
の宮殿文書」と表題をつけておられる如く、フアラ文書の
性質と「表題」にもとづくメソポタミアの初期の政治的発
展を把握するを主目的とされ、ケンギル同盟を主な課題と

しておられるのではない。「王の権力と組織とが永続化さ

れ強化されて行く発展の姿は初期王朝Ⅲの初期におけるシ
ュルツパーク(フアラ)の宮殿文書によってある程度これを

確認するを得」とか「フアラ文書からはこの時代の一般的
な政治状態はただ、見、程度のものしか得られない」と述

べておられるように。またシュルツパークと北方のキシユ

ヤンツバルとの関係にも触れられているし、ケンギル同盟
諸都市は勿論他の都市からの「都市への訪問者」(uru(še)

ši)がシュルツパークの宮殿に雇われて給料の支給をうけ
ている事実もフアラ文書を引いて指摘しておられる。拙稿

の主題は「ケンギル同盟」にあるのだから尚進んで同教授
のケンギル同盟観を追って行きたい。

三 ケンギル同盟の分析と Kengi(r)の意味

ヤコブセン教授に「ケンギル同盟」という政治的概念を
提供した直接の資料はダイメルがその一部を手写し他を翻
字した No. 92 と No. 94 の二文書である。ヤ教授はその
論文の脚註70において両文書を次のように翻字翻訳してお
られる。

No. 92: 182 gurus̄, Unuḡ[㊦], 192 Adaba[㊦], 94 Nibru[㊦], 60 Lagasas[㊦], 56 Šuruppak[㊦], 86 Umma[㊦], Iá ba-dúru-duruna, (Ke-en-gi, Du-du ša sum (-ma), rev. šu-nigin, 670 gurus̄, Iá ba-dúru-duruna)

182名、ウルク人、1927ダフ人、94ニブール人、60ラガシュ人、56シュルuppak人、86ウマア人、他の場所に駐在した人々。

また94の末尾が、

gá-an-še 640 gurus̄, Iá duruna Ke-en-gi

合計640人、駐在した人々、ケンギル(軍)。

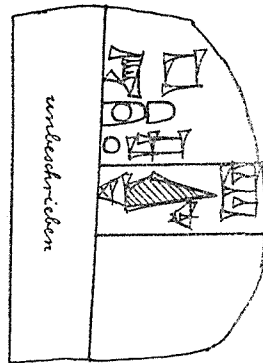
と訳された。そこでこの訳はフアラ文書の綴字法のおおまかいたのため試訳であることわかっておられる。しかしこの試訳はアッカー時代④の ITT 1100 のデータからえられた解釈から導き出したものである。ただし裏面二行目の LU・KU・KU・BA を Iá dab₂-dab₂-ba 「くらえられた人々」と読むことは正しいのであるが、このように訳すと「逃亡者」あるいは「捕虜」の意となって敵側の記録と見ねばならず、フアラ出土という文書全体の性質からこの訳はとらなかつたと記しておられる。

ヤ教授は前掲の()のうちは訳されなかつた。よって筆者はヤ教授が訳されなかつた部分の一行上からの試訳を

行いつた。

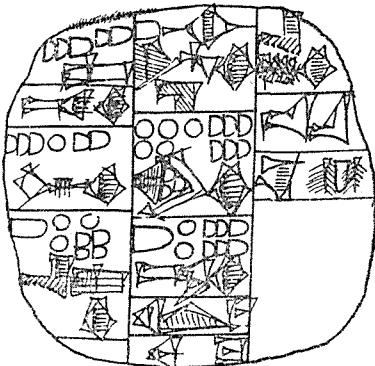
Ob II (45) Iá tukul(-e)-dab₂-ba III (1) Ki-en-gi (2) Du-du (3) (nig-) ša sum(-ma) Rev. I (1) šu-nigin 670 gurus̄ (2) Iá tukul(-e)-dab₂-ba

裏面



表面

92.9A612454



「武器をとった人。ケンギ(地名)。ドッドゥ、与えられた手のもの、合計六七〇人の武器をとった人」

この文意は「ウルク、アダブ、ニップール、ラガシュ、シュルツパークおよびウンマから召集された軍隊はケンギにおいてドッドゥ^⑧の指揮に与えられたもの。合計六七〇人の軍隊」である。

ヤ教授と筆者との両文書の解釈の相違点はヤ教授が *Kengi* をシュメールの地と解されたのに対して筆者はこれを後述するようにシュメールでなく一地名と解する点にある。軍隊の駐屯地がケンギであるとする点である。

シュメール文字 *KU* には種々の読み方と意味がある。

durru, durun と読めば、「居住する」、「滞在する」、「駐在する」の意となり、これを *dab* と読めば「つかむ」、「とる」、「とらえる」の意となる。 *tukul*, (*gisukul*) と読めば「*kabku*」、「武器」、「刃物」の意となる。イシン・ラルサ時代に編纂された王朝表にもたとえば「キシニは武器にて打たれた」(*Kis³ gis³KU ba-an-sig*) の如く *KU* を *tukul* の意に用いている。なぜ筆者が *la tukul* (-*la*) 「武器の人」と解したかは次の理由によるのである。No. 14 の第

一行には 140 *guruš*, *Unu³*, *LÚ*・*KU* と記され第二行には 215 *Adab³* とのみ記され、以下数字と都市名とのみが列記されている。このような記書法はシュメールの伝統的書式であつて、すでに初期王朝I期のウル・アーケイク・テキストにも見られる。すなわち同種類の事項を列記する場合には最初に完全な事項を記し、そのあとは数量と人名、あるいは身分、地名のみが列記されるのが普通であり、時には数量と事項の一部を列記したあとに共通の性質を記し、最後に合計数量とつくられる文書の性質とが記されているのが行政・経済文書のうち、この種のものの一般的書法である。No. 94 は前者の例であり、No. 92 は後者の例である。No. 94 の一―二行に 140 *guruš*/*Unu³* *LÚ*・*KU* と記されており、三行目には 215 *Adab³* と略記され以下同様の形式で四都市名とその人数が列記され末尾に「合計六五〇人、*LÚ*・*KU* EN・GI・KI」と記されている。*LÚ*・*KU* がこれらの人々の身分である。

どうして *KU* を *tukul* = *kabku* 「武器」と解して *LÚ*・*KU* を *la tukul* (-*la*) 「武器の人」と読めば、身分は軍人であることが知られる。また No. 92 の *LÚ*・*KU*・*KU*・*BA*・

を *la tukul(-e)-dab₂-ba* と読んだのは次のような理由による。それは初期王朝末期のラガシエ文書に封地 (*gan kur₂*) を与えられた人々が *ki₂* の 賦役に動員されて給与を受けた記録が多数見出せる。これらの人々を *la kur₂-dab₂-ba* 「クル (= 賦役) をとった人」と呼称している。また使用人や職員を *lu ninda-dab₂-ba* 「パンをとった人」 (*Nik 13 Rev. VII 3*) と呼称している。これらの熟語と対比させて *LU₂·KU₂·KU₂·BA* を *la tukul(-e)-dab₂-ba* 「武器をとった人」と訳したわけである。No. 94 の *la tukul* を *dab₂-ba* の省略されたものとみることとも出来る。このように試訳すれば結果的にはヤコブセン教授が主張されるケンギル同盟の一面、すなわちその軍事的性格が、どうも明確化されることとなる。

シュメール語文獻、ことにある時代の政治的社会的事情をいわば断片的に記録している行政・経済文書の解読の困難さは、一方においては細部においては今なお解決さるべき問題の残されているシュメール文法に依拠しつつ、他方においては多音多義のシュメール文字の性質を考慮して解読に従事せねばならぬ点にある。

この二つの文書において次に問題となるのは *EN·GI·KI* の解釈である。既述したようにヤ教授はこれを「シエメール人」、あるいは「ケンギル(軍)」と解されている。換言せばヤ教授は今日定説となっている *Ki-en-gi* (= *Kengir*) = *ka₂am* すなわち「シエメールの地」と解された。両文書を翻字した故ダイメルも *en-gi₂* と *KI* を *determinative* としているがこれをシュメールの意味に解された。そこでシュメール文獻ではこの語がどのように使われているかを探索してみよう。

ジュスタンの手写したファラ文書集のうちに多くの役職者がある配給物をうけたことを記している文書には、*nis₂-ens₂/EN·GI·KI* とあり (*TSŠ 627, Ob. V. 7-8*)。他の土地の地積を記した文書には 4 (*bar*)-*iku/EN·GI·KI* とある (*ibid. 758, Ob. I. 1-2*)。前者は「*EN·GI·KI* のエンシ職」、後者は「*EN·GI·KI* の土地四ムル」の意味である。 (No. 92 No. 94 と同綴字はこの順序に記されている。) これらの記事が示すものは *EN·GI·KI* はシュメール全土ではなく、ある地名と解さねば意味が通じない。ラガシエのエンシ、エアンナタム (*Eannatum*) は「はげ鷹碑文」

のうちに彼が戦った国々の名を記している。その一部に…
 …/A-ru-²⁴⁷/mu-ha-lam/Su-e/KI・EN・GI/……「アルプ
 を破壊した。KI・EN・GIのシ・エを……」(Rev. VIII.
 25)とある。シ・エを人名と解する理由は同エンシの境
 界石碑文A等に彼が戦った国々のうち国名のみを記したも
 のと国名と君主名とを併記したものが^⑤あるのに比定したの
 である。ここに引用した部分の碑文の内容から推してKI・
 EN・GIは都市名か特定の地名でなければならぬ。また
 ウルカギナ王治世二年の一文書(DP. 51)にはその末尾に
 「ラガシユの王ウルカギナの妻シヤ・シヤ(Shasha)はニ
 ン・アス神(²⁴⁸Nin-a-su)のためにKI・EN・GIにおいて
 (上記の供物を)奉献した」とあり、同年の同内容の他の文
 書(DP. 46)にはKI・EN・GI・KIと記されている^⑥。

叙上列記した記事から決論されることはEN・GI・KI,
 KI・EN・GI, KI・EN・GI₁, KI・EN・GI₂, KI・EN・GI₃, KIと記
 された地名はいづれもシメール全土を指示したものでな
 く、ある地名ないし場所を示している固有地名であること
 である。DP 46のKI・EN・GI₁・KIに於てはKI
 がdeterminativeとなつてKengi²⁴⁷と明らかに都市名あ

るいは地名の姿をとっている。シメール語の綴字法が不
 規則であったフアラ時代のEN・GI・KIは綴字法がよう
 やく安定してくる初期王朝Ⅲの中期ごろのエンナトゥム
 時代になってKI・EN・GIに定着したものとと思われる。
 ウルカギナ王時代の文書にはGIがGI₁の文字に代って
 いる。これは同音の文字が仮借されてしかも同義に用いら
 れている場合が行政・経済文書にしばしば見出されるその
 一例としてこれを理解することが出来る。この地の主神が
 ニン・アス神とその配遇神(?)ニン・キガル神(²⁴⁹Ninkigal)
 であり、ニン・アス神の神官長は「頭の人」(nu-sag ²⁵⁰Nin-a-su)
 と呼称されていることもこの文書(DP. 51, Rev. 1)によつ
 て知られる。しかしKengiの所在場所は現在のところ不
 明である。砂漠か山嶽かに近い要衝の地にあつたものと推
 測される。

実証記録が示すKi-on-giはシメール地方にある固有
 地名であらねばならぬ。しからば次に生ずる問題はこの
 Kengiとシメール全土の呼称となつたKengiとの関係
 はどうであるか。この問題を解く一方法は何時頃から
 Kengiが全土的呼称となつたかを明らかにすることである

う。現在のところケンギが全土の意味で使われている最初の文献はラガシュのエアンナトゥム一世とその甥エンテメナとの中間の時期に措定されているウルク国王エンシヤクシュアンナ (Enshakushanna) の碑文である。かれの碑文に「ケンギの主、国土の王」(en ki-en-gi ingal kalam-ma) の称号をかれは使っている。ケンギが全土の意味に使用されるようになった誘因は、六主要都市の結成した全土の意義をもったケンギ(ル)同盟の本部所在地ケンギ(ル)の名が恐らく同盟崩壊後のある時期に同盟の全土の意義が回顧されたことにあるであろう。そして現在の資料が示すところではケンギを全土的に使用した最初の人がかつてのケンギル同盟の指導的都市であったウルクの国王であったことも示唆的である。

次に僅少の二つの文書が語るケンギル同盟の内容について検討を行つてみたい。

四 ケンギル同盟の組織

No. 92 と No. 94 の両文書はヤコブセン教授の解される如く同性質の文書である。ただ94号文書では六都市から

の派遣軍の人数について各都市からの人数と合計数との間に相違がみられる。前者を計算すれば七三三人となり、文書には合計は六五〇人と記されている。この誤差は文書を記録した書記の誤記か、翻字された故ダイメル教授の誤写——ダイメルは人数は両文書ともシュメール文字のまま丹念に手写されている——かあるいは各都市からはじめに派遣された員数のうち八三名は中途に戦死か病死して同盟本部に最後まで駐在した実数が六五〇名であったかのいづれ

ケンギル同盟軍の構成表

都市名	No. 92	No. 94	合計
Uruk	182 ②	140 ②	322 ②
Adab	192 ①	215 ①	407 ①
Nippur	94 ③	74 ⑤	168 ⑤
Lagash	60 ⑤	110 ④	170 ④
Shuruppak	56 ⑥	66 ⑥	122 ⑥
Umma	86 ④	128 ③	214 ③
合計	670	733 (650)	

附記 ○内の数字は派遣員数の順位、
() は文書に記されている合計数を示す。

九二号文書では各都市の派遣員数とその合計数とが一致している。次に検討の便宜上両文書に記された都市順にしたがっ

て員数と合計数との表を掲げる。

中原「ケンギル都市同盟について」訂正

一〇三頁上段

一〇行目 「最^x下^x位」を「第^o四^o位」に訂正。

一五―六行目 「バランスの最もくづれているのがウンマであり」を抹消す。

一六行目 ラガシュの上に「ウンマ」を入れる。

一〇三頁下段

四行目 ニップールの次に「ウンマ」を入れる。

五―八行目 「(二)」項を抹消す。

九行目 「(三)」を「(二)」に訂正す。

一八行目 「(x+26 Ia tukul」を「(x+26 Ia tukul Unug)」に訂正す。

両文書の示すところでは六都市から同盟本部の所在地ケ

ンギ(ル)に派遣された人数は区々であった。前述した如くヤコブセン教授は両文書ともウルクが筆頭都市であるため同都市がケンギル同盟の指導的地位にあつたであらうと推測された。今これを派遣軍人員数の点からみると両文書ともアダブが第一位でウルクは第二位である。両文書において順位の変らないのはアダブとウルクとシュルツパークのみである。シュルツパークはいづれにおいても六位と最下位にある。またウンマの場合は図表が示す如く一方では最下位にあるが他方では第三位にあり、合計数では三位となつてゐる。ニツプールの場合は一方が三位、他方が五位、合計数では五位である。ラガシユは五位と四位、合計数では四位である。このように派遣人員数を分析してみると順位の変わらないものは一位アダブ、二位ウルク、六位シュルツパークの三都市である。バランスの最もくづれているのがウンマであり、比較的バランスのとれているのがラガシユとニツプールとである。

以上の分析によつて推測される六都市同盟の派遣軍の構成は次のような規約あるいは諒解が存在していたのではな

かろうか。

(一) 派遣軍の割当はその国力に対応するある一定の比率によつたものではなからうか?——アダブ、ウルク、ラガシユ、ニツプールの場合——

(二) 都市のその時の事情によつて一定割当率に達しなかつたような場合には次回において、その過不足分を精算することが認められておつたのではなからうか?——ウンマの場合——

(三) 同盟派遣軍の維持費の分担比率以上を負担する場合には派遣軍兵数は比例的に減ぜられたのではなからうか?——シュルツパークの場合——これは自由民人口十六万を有したシュルツパークの派遣軍兵数が最下位であつた点とヤコブセン教授も指摘しておらるるようにファラ文書のうちに軍事的性格をもつた文書と大生計集团的物量を記録した文書とが散見される事実とを結びつけての推測である。

TSS 763 は粘土板の断片であるが表面に「一一九の立派な衣服」(119 tög-kege)「六八のやぶれた衣服」(68 tög hml)とあり、裏面に「x+26武器の人、ウルク」(x+261a fufml)と読める文書もファラ文書のうちに見出せる。これはウル

ク派遣軍兵の衣料がシュルツパークで調達されたことを意味した文書であろう。

以上の資料分析からの推論は僅か二文書からのものである。フアラ文書の数はダイメル、ジュスタンの出版したものにとどまらないであろう。未発表の粘土板文書のうちにこの種の文書が眠っているかも知れない。(ジュスタンは一九五七年に、一九三七年のHSSの補遺として同じイスタンブール博物館所蔵の粘土板文書から、五〇個ばかりを追加して手写出版している。)

次にケンギル同盟の軍事目的は東方の山嶽、西方の砂漠からの蛮族のシュメールへの侵入を防ぐ防禦的なものであったものと推測される。その理由としてはTSS 68 (Or. II, 4)に *mar-tu* の語が見えることである。

この文書の表面には「二五人が三個のパンを、四五人が一個のパンを、二八人の女(E)が一個のパンをうけとった。(これらの人は) *mar-tu* (後のアムル人) (である)」と記され、裏面には「大きなパン一四八」と記されている。この文書は恐らくシュメールの地に西方の砂漠から侵入してきた野蛮な遊牧民(マルトウ・アムル族のうち)のうち捕虜と

なり奴隷化されていた者への食料給与の記録であろうと考えられる。所謂アムル人と呼称されている人民は初期王朝Ⅲの初期時代にすでにシュメール史と関係があったことが知られる。東方のエラム山地からの蛮族の侵入は奴隷(G)、女奴(*gemé*)の文字が「山と男」、「山と女」の会意文字であり、初期王朝Ⅰ期のウル出土の古拙文書のうちにすでに見出されることよって視知することが出来る。たとえば E. Burrows の UET. II no. 259 文書の表面に人名が記され、裏面に「奴隷二三、女奴一一」(23 *er/12 gemé*)と記されている。

西紀前三千年紀の中期はシュメール地方の富と繁栄とがその最盛期に到達した時代であるとすれば、山嶽、砂漠の野蛮人がこれをねらって侵攻掠奪の機をねらったことは当然である。

ケンギル同盟の主目的は軍事的なものであったが同時に同盟都市間には親善友好の政治的関係も樹立していたものと考えられる。この点についてはヤコブセン教授が指摘しておられるように五都市からやってきた多数の人々がシュルツパークの宮殿使用人に登用され給与をうけている事実

がこれを証明している。

TSS 150 文書は監察官 (nimgir) 侍従 (sukal) 書記 (aub-sar) 監督 (ugula) 代理 (maskim) 等上級の宮殿使用人の給与表と考えられるがこれらシュルツバーク人の役職者にまじって五都市からの人が一名づつ給与された大妻の数量とその人名とが記され、そのすぐ下の行に給与をうけてないシュルツバーク人の監察官 (nimgir) の名が記されている^⑤。この五名の五同盟都市からの人は恐らくシュルツバークに派遣されていた使節であるようにも解される。これは初期王朝末期にラガシュとアダブとの王妃がお互に親善の贈物を交換した際両国に各々駐在していた人がその任にあたっている事情を記した一文書 (RTU 19) からの推測である。

五 ウル古拙文書にみられる都市同盟

ヤコブセン教授は初期王朝 I 期に措定されているウル出土の古拙文書のうちにすでに都市同盟が存在していたであろうと「ケンギル同盟」の原型を指摘しておられる^⑥。

ヤ教授は E. Burrows, Ur Excavations Texts II Ar-

chaic Texts (= UET. II) no. 371 の文書がシュメールの初期の軍事組織を示す資料であると指摘された。すなわちこの文書を将校 (nu-banda) の下に下士官 (ugula) に引率された兵士が部隊 (nu-sir-ra) に編成されているそのリストであると解された。また同教授は Legrain, Archaic Seal- Impressions (UE. II) の (pp. 21-24) 捺印銘をよびレグリンのこれら捺印銘の註訳をもとにして謎の土製壺に捺印されている集合印章銘のうちにシュメールの主要都市の名を見出された。すなわち Kes, Adaba, Uri (No. 400, 401) や Nibru, Adaba, Uri, X, Kes, Zarrar (No. 429) の名を見出された。そして同教授はこれらの集合印章銘はこれらの都市からウルに物資を送付した公的引渡しの集合印章銘と解された。この外ヤ教授は UET. II no. 366 に [G] I・EN・KI と記された三文字を Ke-en-gi と読まれた。以上三つのデータを結びつけてヤ教授はケンギル都市同盟の存在を主張されたのである。

ヤ教授がとりあげられた no. 371 文書を詳細に分析すれば次の如くである。この文書は約半分が失われており、残存部分もかなり文字が消されている。表面の Col. I 6-9 に

は

6) 21 ugiula /7) 21 ugiula Gud-tur/8) 21 ugiula Ag/9) nu-banda Lu-lu 二一人。ウグラは某。二一人。ウグラはグド・トゥル、二一人。ウグラはアグ。ヌバンダはルルとあり、裏面 Col. I 1-3 に、

1) gi-an-se 226 un-sir-ra nu-banda Amar-ud-sar/2) 63 nu-banda Lu-lu/3) 64 nu-banda Ama-é-sar 「総計二一人の部隊、ヌ・バンダはアマール・ウドサル。六三(人の部隊)、ヌ・バンダはルル。六四(人の部隊)、ヌ・バンダはアマ・エ・シャル」……

とある。将校ルルは六三人の部隊長であり、ルルの配下には三人の下士官がそれぞれ二名の兵士を引率していることが知られる。将校アマール・ウドサルの二二六人の部隊の下士官の数と兵士の数とは表面 Col. I 1 以下に記されているが文書の破損のため第一行をのぞいては数字と人名の一部分のみでこれを知ることが出来ない。残存している文字の最後は……Amar-[ud]-sar と読める。第一行目は“43 sir-ra ugiula Amar-kà-ga” 「結集された四三人、ウグラはアマール・ツガ」(Ob Col. I 1) である。un-sir-ra の語意

は結集された (sir-ra or sar-ra) 人民 (un or ng or nka) である。43 sir-ra とか 21 (sir-ra) は「結集された四三人」、「結集された」二一人の意味であるが、この四三人とか二一人という人数は——(粘土板の残存箇所)に 32, 48 の数字と ugiula の語が見える)——氏族 (im-ru) の大小によってその氏族内の各小家族 (e) から集められた家長 (ab-ba) や壮者 (sun) の数であろう。したがって un-sir-ra は氏族単位で結集された部隊であるように考えられる。ugiula や nu-banda は nu-banda e-gul 「宮殿のヌ・バンダ」の語彙が示すように宮殿の官職であるが恐らく ugiula に任命された人々は小家族の家長のうちの何名かであり、nu-banda に任ぜられたものは氏族長 (ab-ba im-ru) であつたろう。二二六名の部隊長となつたアマール・ウドサルは大氏族長、六三名の部隊長となつたルルは小氏族長であつたろう。とまれ初期王朝 I 期のウルの古拙文書の示す軍事組織は王権と氏族共同体との結合によって編成されたものと考えたい。次にヤ教授が Ke-en-gi と読まれた no. 366 文書を検討してみる。この文書も大部分が破損されている。数行の残存箇所から知られることはこの文書には分割された土地の

地積と人名とが記されている。第二欄には 1) 2 (bar) — / 2) 1 (bar) — / 3) 1 1/2 (bar) Lu-lu-ti / 4) 1 (bar) Amar-amar Ga⁴ / 5) 1 1/2 (bar) Lam-lam / 6) 2/3 (bar) 4 (iku) Lugal... / 7) 2/3 (bar) 3 (iku) ⁴Inanna-ag。第一欄は殆んど破損しており、四行目の残存部分に [G]I・EN・KI とある。この四行目の GI・EN・KI を地名とすれば第二欄四行目の Ga⁴ と同じ性質の地名と見ねばならない。フアラ文書の場合と同様にシュメール全土を指示しているものではない。

ヤ教授が集合印章から摘出された都市のうちにはフアラ文書の六都市同盟(ウルク、アダブ、ニップール、ラガシュ、シニル、ツバークウンマ)と比較すればラガシュ、ウンマとシニルツバークの名が見えない。その代りにウルとラルサ(Zarar = Larsa)とケシ⁴(キシ⁴ではない)とXとが加わっている。もしウルを同盟の補給基地とすれば物資をウルに送達したとする集合印章にウルの名が記されていても不自然ではない。ウルは経済と同盟の経済とは別個のものであるからウルがその同盟分担費を同盟本部に支払ったとすれば解釈はつく。筆者が四章で推測した同盟費分担の義務がこれによって証明されることとなる。また no. 366 文書の GI・EN

・KI をフアラ文書の EN・GI・KI と同じ場所とし、ここに同盟本部が置かれたとすればウルはフアラ文書時代のシニルツバークと同一の立場すなわちケンギル同盟の補給基地となっていると解することが出来る。

ウル出土の古拙文献の行政文書から初期王朝I期時代のシュメールにおいてはすでに軍事的都市同盟がシュメールの都市国家の幾つかによって形成されていたことが推測される。

おわりに

本稿において筆者はヤコブセン教授が主張されたケンギル同盟をヤ教授と同様に行政文書を資料として種々検討してきた。しかしこれはケンギル同盟そのものの検討であってケンギル同盟の初期メソポタミア史における位置づけについては触れなかった。初期王朝I時代の都市同盟は初期王朝II末期まで同盟加入都市の変化はあったが続いたのであろうか。あるいは都市同盟は覇権都市の出現によって一端崩壊し、その覇権都市の没落後再びいわば第二回都市同盟が結成されたものであろうか。都市同盟は間かつ的な一

時的の政治現象であるのかあるいは初期王朝Ⅲ時代までは都市同盟という政治形態が本質的なものであって覇権都市の出現が一時的政治現象であるかの問題などの考察には意識的に触れなかった。これらについては現在の筆者ははっきりとした決論の見解をもっていないからである。

ジャムデト・ナスル期の文書に見られなかった「王」を意味する LUGAL の文字はウルの古拙文書には多数見出される。その多くは人名の構成要素としてである。たとえば Lugal-unkin-gal-pád-da 「ウキン・ガルが選んだ国王」の如く国王出現の事情を示唆するような人名が見出される (UET II 85, II 4)。『人文』の上掲論文に述べた如く unkin-gal は本来は氏族連合体の長を意味したものと解されるが (三八―九頁)、ウル古拙文書のうち職員録と目される一文書 (no. 112) には Gi-na unkin gal 「ギナ (人名)・ウキン・ガル」(V10) が nu-bánda é-gal 「宮殿のヌ・バント」(V16) ga-gal gal [gahallu] の長」(I 9; V 4; V 17) nuš-lalah 「蛇使」(III 8) などの職名や人名と共に記されている。したがってこの時代にはウキン・ガルはすでに王権の支配下におかれた軍司令官の如き地位にあっ

た武官と解すべきであろう。

また UET II 20 には「耕地 (gan) 19 (フル)、30 (グル) の種穀 (Se numun) 20 (シル) の牛の飼料 (Se sud-ku) エルシ (人名) (一イタから) 1 $\frac{1}{3}$ (シル) 2 (シラ) の大麦が収穫された (Se e)」と記されているが、その用語や書式は初期王朝Ⅲ末期の経済文書のそれと殆んど同じ表現が用いられている。

製作年代が初期王朝Ⅰ期に措定されているウル文書、ⅡⅢ期の交のファラ文書はⅢ期末期の行政・経済文書に較べて、その文字の古拙、綴字法の不定、表現の単純などの差違は認められるが同じ性格をもっている重要な初期メソポタミアの社会経済史の研究資料であり、その一部の文書は政治史の研究資料ともなりうる文献である。

故 A. Deimel 教授以後はこれら文書の資料的価値を無視しがちの欧米学者の間において、米國アッシリア学の碩学ヤコブセン教授がメソポタミア政治史研究にその資料としてこれら文書を使用されたことはこの方面の実証的研究を一步前進せしめるものとして、まことに慶賀すべき業績といわねばならない。

① 『西南アジア研究』京大西南アジア研究会 第一〇号 (一九六三) 一〇九—一二四頁。

② 『人文』京大教養部 第九集 (一九六三) 三六一—八頁、四一—一二頁。

③ S. N. Kramer, *The Sumerians*, Chicago 1963, p. 88-9.

④ I. M. Diakonov, *Society and State in Ancient Mesopotamia*: Sumer, Moscow, 1959, p. 11 の脚註 4 および p. 291.

⑤ *maš-ga-na* は *maš-gān-a(k)* と *maš-gān=maš-kārum* 「貯蔵所」「置場」などの意がある。しかしここでは *maš-gān* と書かれず、*maš-ga-na(maš-gān-a(l))* と「*gān* の *maš*」の如く分析され、所有格で表現されているので、両語にわけて *maš=mašru* 「境界」、*gān* を *a-ša-gān-territory* 「地域」「土地」の意味にとって「土地の境界」「地域の境界」「区劃地」として *sag* は「頭」であるから *maš-ga-na-sag* を「主要な区劃地」すなわち政治的意味にとって「主要な行政区」「州」の意に解する。

⑥ 「」内は(15)行以下破損欠文のところを Thureau-Dangin の解釈に同意して補足したものである。なお彼は(12)行以下を “Ausser Akkad/dem Königreiche/das er empfangen hatte, [wurde das Patrimonium von Lagas an N. N. gegeben] と訳されて、(14)行の「から」(ta)の文法要素を生かされなかった。筆者はこの欠文中にラガシュの地積の総計 (su-nigin su-nigin)——初期王朝期文献の *su-an-ne*) とアッカド王名とが記録されていたであろうとアッカド王マニシュトゥスのオペリスク碑文の「合計」書式から推測したい。アッカド語のオ

ペリスク碑文の一例を引用すれば、ŠU-NIGIN 7 GURUŠ (A. IV. 5), ŠU-NIGIN 10 GURUŠ (A. V. 13), ŠU-NIGIN ŠU-NIGIN 17 GURUŠ (A. V. 15) など。石柱碑文には「五トマの *gān ambar-Lagas* と五トマの *gān gir-gir-mah* との合計 (su-nigin) 一〇トマの土地」(Rev. III. 5-8) と記されているように合計地積でまとめられている。もし石柱碑文の(8)行目の合計地積 $x + 18094$ bur $13\frac{1}{4}$ iku が碑文に記された諸合計の合計であるならば、総計と記録されるべき筈である。またもしそれが碑文に具体的に記されている諸合計と同性質のものならば(8)行目の合計地積となる具体的な土地名とその地積とが記録されていないければならぬ。それが記されていない。なんとすれば(8)行目の上は石碑が広い空白 (breiter leerer Raum) となっているがそこは破損されて (abgebrochen) いるのではないからである。そこで(8)行目の合計地積と石柱碑文に記された諸土地名と諸地積とは別個のもの合計地積と考えねばならない。すなわち、これはアッカド王がアッカドの外に王國のものとして継承した土地の合計、すなわちシュメールの地積と考えねばならない。そしてラガシュの地積は欠損している最後のところに記されていたものと推定するのである。

⑦ 前掲拙稿一一八頁。

⑧ 同一一九頁。

⑨ ルーガルザギンがラガシュに侵入してこれを大掠奪した状態を後に記した一文書にウルカギナの称号を *lugal Lagas* とせず、ラガシュの一地区ギルス (Girsu) の王と記している。

(Thureau-Dangin, Die Sumerischen und Akkadischen Königinschriften (= SAK と略す) S. 58)。¹⁹ キヤノン氏
ゼミガントの失地を 58 以上に見積「*ptu-ur*」(Diakonov, op.
cit. p. 291)。

²⁰ Zeitschrift für Assyriologie N. F. 18 (1957) SS. 91-140.

²¹ *ibid.* SS. 120-2. VI Palace Records from Shuruppak 12
なうて論述なれり。

²² A. Deimel, Wirtschaftstexte aus Fara (Die Inschriften
von Fara III) 1923—Fara III (WF) 略字 No. 92. No. 94.

²³ ITT. 1100 は拙稿「メソポタミア都市国家と「国土」の人口に
つゝ」の一九頁に誤出つゝ。

²⁴ *šu sum* は *ng-šu-še ba-sum* > *ng-šu sum-na* > *šu sum*,
「手に与えられたもの」の意である。Nik. 14 の五名の
ル・キの配下が *ng-šu-še ba-lah-és* (or *ba-lalah-és*) 「手
ものとして連れて行かれた」(Ob. I. 1-7) とある。この文書に
は動員された人名と死者の人名とが指揮者の名とともに記され
ており、文書の末尾に “26 *ng-šu* 「二六名の手にあるもの」
——指揮者のもとで働いた生存者——と記なれり。²⁵ Fara
III. 63 には “*še anše sum-na*” 「手に与えられた大妻」
「与えられたロンの大妻」(Rev. II. 4) 以外 “*še-*
numun sum” 「与えられた種穀」(TSS² 832, Ob. II. 3) *šu*
summa (*ibid.* 826, Rev. I. 2) *šu sum* (*ibid.* 751) の表現が
見られる。

²⁵ 人名としたがむしろ *muš-lalah* (*muš-lahhu*) 「蛇使」の
語が示すように DU. DU. *lah-lah* > *lahah* (*ridu*) 「追立」

る」 「連れて行く」 「導く」の意とて「指揮者」と解す
る方がよいかも知れない。ちなみにメソポタミア文書には “2 (*anše*)
Lá-lá/muš-lalah” 「二(頭ロンの)メソポタミア蛇使」(TSS²
222, III. 12-3) “1 *iku/Du-du/muš-lalah*” 「一イム(の十
地)ノム・ドゥ・ドゥ蛇使」(962, I. 1-3) などが散見なれり。
メソポタミアのメソポタミア王の「家族碑文」のなかで Banar
と云ふ「蛇使」が重臣として取扱はれり。

²⁶ Deimel, SL 536, 27). またウヌ第三王朝時代の行政文書に
は (LU) G15. KU. E. KU. BA. ME (16) *gš tukul-e-dab-*
ba me 「武器とてた人々」と記なれり。(Hussej, Sum-
erian Tablets in the Harvard Semitic Museum, Part II.
No. 14, Rev. I. 4)

²⁷ Fara III の序文 一五頁。

²⁸ ウヌタ・ウヌ・キ・ウタットと戈を交え、ウヌムを撃破し、
ルムを破壊し、……ウヌ・ウタクキの王 (Zu-zu/ugal Ak-
kade) をアクシヤクに追撃した等々。同右碑の第三欄から第四
欄にかけて記録してらる。

²⁹ Rev. VIII, 5.

³⁰ C. J. Gadd, The Cities of Babylonia (C. V. H. vol. I.
Chap. XIII) の末尾に記載なれり。「年表」に於て。
Thureau-Dangin SAK S. 156 (a) Vase A 4-5) に記載。
A. Poebel の翻字翻訳なる同王の一碑文は同王はキニタ王
キニタ・ウニタタルを捕虜にしたと記してらる。(A. Poebel,
Historical Texts (UMIPBS vol. IV, No. 1, p. 152). 年代は
Gadd, op. cit. の年表に於て。

①⑧ R. Jestin, *Nouvelles Tablettes Sumeriennes de Šuruppak au Musée D'Istanbul*, Paris 1957—NTS²—TS²—Tablettes Sumeriennes de Šuruppak Conservées au Musée de Stamboul, paris 1937.

①⑨ C. J. Gadd, *op. cit.* p. 42. びてギヤハは国力繁栄の現象は単にウルの王墓の豪華な副葬品に象徴をわけてゐるよりも、ヒロニマに視られるばかりでなく、ヒシントにおいては第四王朝の大ニラマツマの建設をれた古王国「小アシラの Tony II. 期の豪華な宝庫」ノロホンテ、ス南のトラクト (Dorak) の王墓に示されてゐる如くこの時期の古代世界に共通したものであると述べらる。

②⑩ 96 (sita) Sa-gú-ba/Ulugst/Ur⁴-Numustda/ningir (Ob. III 12-IV 1-3) 「九六 (ニラの丈夫)ノニヤン、ン、ウナツ (の人)ノウナ・クトニ、ダ、ニ、ningir」 96 Lú-bara-dug/Ummast/É-gud-dug-abzu/ningir (Col. IV. 8-11), 96 É-pa-é/Adabst/Ur⁴-Nu-must-da/ningir (Rev. IV. 3-6), 96 Ur⁴-Dumu-zi/Nibirust/A-nun⁴-Sad-da/Ningir (Rev. IV. 7-10) とある。ウナツ、ウナマ、ノダブ、ニヤブールからの人名は記されてあるがこの粘土板は表面第七欄から裏面第一欄全部と第二、三欄の下半分が破損してゐるので「ラガシユ」からの人はこの部分に記されてゐたものと推定して誤りなからう。Ningir=ningiru には Vogt, steward など種々の意味があたえられてゐる。初期王朝末期においては動産(奴隸)、不動産の売買行為が成立した時、その旨を告知する行事を行ひ世話役は ningir であった。

②⑪ この文書はラガシユのエンシ、ルーガルアンダ治世三年のもの

ので、これによるとアダブのエンシ妃ニン・アグリグ・タイがラガシユのエンシ妃バルナムタルラに贈物をした際アダブのエンシ妃の臣アネダヌメアがアダブに滞在してゐるラガシユの人マアルガスとともにラガシユに贈物を持参した。その際アダブのエンシ妃はマアルガスに一着の衣類を与えた。これに対してラガシユのエンシ妃はアダブのエンシ妃に返礼の贈物をした。マアルガスがアダブに同行した (e-da-bin)。ラガシユのエンシ妃は任を果したアダブの人アネダヌメアの勞をねぎらつて三着の衣類と一壺のバターを彼に与えた。この文書によると阿王妃とも相手国の使臣に慰勞の下賜品を贈つてゐるし、ラガシユの人マアルガスが再びアダブに帰任してゐることが知られるので両者とも相手国に滞在してゐた使臣であつたと考えるのである。マアルガスが商人 (dam-gar) と見ることはこの文書の内容から推してむづかしいように思われる。

②⑫ Jacobsen, *op. cit.* III. Earliest Political Pattern: Primitive Democracy, 4 Date of Maximal Extension, p. 107-9.

②⑬ 氏族と小家族との関係は『人文』前掲論文、三五—三八頁を参照。

②⑭ UET II, No. 112, Col. V, 16. 同破片 1. 3.

②⑮ 註⑩を参照。

②⑯ たとえば最近の改訂版ケンブリッジ古代史の分冊の執筆者 Gadd 氏はフアラ文書は知識のため (教科書) に記されたもの以外は物品、数量、人名などのリストであつて non-utilitarian texts であると述べてゐる。Gadd, *op. cit.* p. 4.

(一九六三・一一・五) (京命館大学教授)

On *Kao-shên* 告身 in *Wei-tsin-nan-pê-ch'ao* 魏晉南北朝
—from wood to paper—

by
Osamu Ōba

The study of an official written appointment in *Wei-tsin-nan-pê-ch'ao* 魏晉南北朝 has been difficult because of lack of the traditional inherited articles or sentences written or composed. The writor, by his analysis on the appointments of the *Han* 漢 and *T'ang* 唐 periods, manages to trace some shadow on the appointment of this mediate period from meagre articles. No institution and no sentences were not inherited, but we plan to investigate especially the following three points, at first how its procedure was, and next what material the appointments were written on, and what style its sentence was. At least, the appointment in the *Han* period was written on wood, while that in *T'ang* on paper, which denotes the transition of wood to paper in the *Wei-tsin-nan-pê-ch'ao*.

Around this change of writing material, three other points will be treated in this article. Naturally, the discussion has a trend to the cultural history, somewhat neglectful of the aspect of institutional history, the latter of which shall be treated in future collectively.

On the Kengir League

—A problem of Ancient History of Mesopotamia—

by
Yomokurō Nakahara

Professor T. Jacobsen proposed the existence of the “Kengir League”, a league of major cities in Sumer in the period of the E. D. I and in the transitional period of the E. D. II~III in his

elaborative work of "Early Political Development in Mesopotamia" in *Zeitschrift für Assyriologie*, N. F. 18, 1957. He drew the idea of the Kengir League from administrative documents of Ur archaic texts and jar sealings impressed with collective seals unearthed at Ur, and from similar documents of Fara texts, especially WF 92 and 94. Administrative and economic documents of these texts are, I believe, important sources for the study of political as well as socio-economic history of Ancient Sumer. It is certain that the appreciation of these documents is a very difficult and quite painstaking task for scholars. It is due to the character of these texts, i. e. the archaic writings, the ambiguities of the orthography and the simplicity of expression.

I agree with the assumption proposed by Prof. Jacobsen that a league of some major city states in Sumer for the purpose of defending the civilized land of Sumer from attacks of desert nomads or mountain barbarians. In TŠŠ 648 we can find a mention of *mar-tu* people who received foods.—45 *gurus*, 1 *ninda šu ti*, 28 *mí*, 1 *ninda šu ti*, *mar-tu*, "45 men who received one (piece of) bread each. 28 women who received one (piece of) bread each. (They were) *mar-tu* (people)" (I 4-II 1-4). *mar-tu* people here mentioned were no doubt enslaved captives of wars.

Prof. Jacobsen appreciated the word EN. GI. KI in WF 92 and 94 as the word applied to the country of Sumer as a whole. According to my investigation, however, of some documents of Ur archaic texts, Fara texts and others, EN. GI. KI mentioned in WF 92 and 94 does not seem to indicate the country of Sumer as a whole. The reason why I should think so depends on the sequent evidences of the documents.

a, (1) 4(*bùr*)-*iku* (2) EN. GI. KI (3) 2(*bùr*) 6(*iku*) A. A. KI
 "72 *iku* (of) EN. GI. KI, 42 *iku* (of) A. A. KI." (TŠŠ 758, ob. I 1-3).

b, (7) X *nig-ensi* (8) EN. GI. KI "X *ensi* of EN. GI. KI" (ibid. 627, ob. V 7-8). X indicates an unknown numeral sign.

c,(1) *A-ru-a^{ki}* (2) *mu-ha-lam* (3) *Šu-è* (4) KI. EN. GI
 ".....He destroyed Arua and [fought with?] Shue (probably

personal name) of KI. EN. GI....." (SAK p. 18, VIII 1-4).

d, (1) *Ša₆-ša₆* (2) *dam Uru-ka-gi-na* (3) *lugal* (4) *Lagas^{ti}-ka-ke₄* (5) *"Nin-a-su* (6) KI. EN. GI₄ (7) *šu e-na-tag₄* "Shasha, wife of Uru-kagina, King of Lagash, for "Nin-asu in KI. EN. GI₄. offered (these offerings) (DP 51, col. 8).

e, KI. EN. GI₄. KI (DP 46, col. 8, 5)

f, A document (UET II, 366) in which [G]I. EN. KI is mentioned is a broken fragment and it seems to be a list describing a sort of land allotment to many persons. (1) $2(b\bar{u}r)$(2) $\frac{1}{3}(b\bar{u}r)$ (3) $1\frac{2}{3}(b\bar{u}r)$ *Lu-lu-ti* (4) $1(b\bar{u}r)$ *Amar-amar* GA. KI (col. I 1-4).....[G]I. EN. KI (col. II 4).

All these documental evidences show that the word GI. EN. KI, EN. GI. KI, KI. EN. GI, KI. EN. GI₄, KI. EN. GI₄. KI must be appreciated as a local place name. Therefore EN. GI. KI in WF 92 and 94 must be also appreciated as a local place name.

I intend to give a tentative translation of WF 92, col. II 3-rev. I 1-3, thus: *lú tukul (-e)-dab₆-ba*, EN. GI. KI, *Du-du, šu sum (-ma)*, *šu-ni^{gin} 670 gurus, lú tukul (-e)-dab₆-ba* "men who took weapons. (They were) given to Dudu (the commander) in Kengi. Total: 670 men who took weapons". That I read LÚ. KU. KU. BA as *lú tukul (-e)-dab₆-ba* depends on the following evidences. In a text of the time of Ur III (Hussey STH part II no. 14, rev. I, 4) GIŠ. KU. E. KU. BA. ME which I read (*lú*)^{gis} *tukul-e-dab₆-ba-me* "(men) who took weapons". In documents of the time of Uru-kagina (STH, part I nos. 6-13) *lú kur₆ (-e)-dab₆-ba* "men who took *kur₆-corvée*". In Nik. 13, rev. VII, 3, *lú ninda (-e)-dab₆-ba* "men who took foods".

If GI. EN. KI or EN. GI. KI is a local place name as I indicate, it may be assumed as the headquarter of the Kengir League where stationed the soldiers despatched by the members of the League. In this case, Ur and Shuruppak may be assumed as cities of the supply base for the Kengir troops.

In a royal inscription of Enshakushanna, King of Uruk in the middle period of the E. D. III, Kengi was used as the designation of the country of Sumer as a whole. He took the title of *en*

kengi lugal kalam-ma “Lord of Kengi and King of the Land”. The location of Kengi is unfortunately unknown at present just as many important places of Sumer are unknown.

Some Problems on the Witsen’s Map of North-eastern Asia

by
Akio Funakoshi.

Witsen (1641–1717), mayor of Amsterdam, president of the East India Company, and ambassador to the Court of St. James’, was a Dutch gentleman, who was interested in the Orient in his days of Leiden University, from which he graduated to try to collect geographical material in the north-eastern Asia, staying in Moscow as a suite of the diplomatic mission. His work, ‘Norden Cost Tartarien’ (1692, 1704, 1785) was said to be the collection of the then east-Asian knowledge. This article will treat the maps of north-eastern Asia of his own making, tracing its origin, showing its characteristic, and we want to point the unique feature of the land different from the sixteenth and seventeenth centuries’ West-European map making world, and then we would evaluate its importance of the geographical history in the two capes stretching out to the north-eastern sea near the north-eastern end of Asia which were the characteristic of his map, a similar type of north-eastern part in the map of West-European world from the end of the seventeenth century to the middle of the eighteenth century. His book, ‘Norden Cost Tartarien’, was seemed to be introduced in Japan at the end of the eighteenth century, a copy of which was summarized and translated and annotated as ‘*Tōhoku-dattan-yasaku-zakki-yakusetsu*’ 東北韃靼野作雜記訳説 by *Sazayoshi Baba* 馬場貞由. At the end of this article, analyzing the background, object, method, and result of this ‘summary’, through the Japanese evaluation of the Witsen’s work at the beginning of the nineteenth century, we try to evaluate the basic importance of Witsen’s material.